



郷小だより

茅ヶ崎市立浜之郷小学校

2024年9月2日

9月号

校長 安倍 武雄

学校教育目標 ～支えあう・聴きあう・学びあう～

子どもたちが自分を再発見し、友だちを再発見し、学ぶことの価値と意味を再発見して「人生最高の6年間」を生み出す学校、そして、その営みを通して教師も親もともに育ちあう学びの共同体としての学校でありたい。

44日にわたる夏休みが終わりました。やはり、学校という場所は子どもたちがいてこそだということを改めて実感します。誰もいない校舎はひっそりとして気を失っていましたが、何か息を吹き返したようです。今日から、前期後半が始まりました。前期のまとめに向けて今一度、朝決まった時間に起きる、朝ご飯をしっかりと食べる、次の日の準備をきちんとする、早めに床に入るなどまずは生活リズムを整えることを大切にしていきたいですね。

さて、この夏休みに教員も講演会などに出かけ、いろいろと勉強をするわけですが、その中で私が「なるほど！」と感じたものをご紹介します。

7月26日に教育センターで行われた「第14回響き合いシンポジウム」での「安心感の輪が支え促す豊かな探索～自発的遊びが拓く子どもの未来～」という東大教授遠藤利彦先生のお話でした。

「子どもは容易に怖がる・不安がる存在である。だから、泣きながら身近な誰かにくっつくとする。そして、くっついて安心感に浸ろうとする。」これを、「アタッチメント」といいます。身近な誰かにくっつくことによって、「安心感」を回復・維持します。そして、保護してもらえることの確かな「見通し」をもち、「見通し」に支えられて自発的「探索」(冒険・挑戦)が始まります。さらに「一人でいられる能力」=自立性の獲得・拡張につながっていくというお話でした。

子どもがやたらべたべたと親に(中には先生にも?!)くっついていくのは、そういうことなのか!とストンと落ちたように感じました。よく、きょうだいが生まれたとたんに赤ちゃん返りをしたり、入学直前直後や学年の終わりや始まりに、不安定になって甘えて来たりするのは、アタッチメントを必要とする子どもたちにとっては当たり前の姿なのだと思いました。

そうだとしたら、私たち大人は子どもたちにどのように接していけばよいのでしょうか。そのヒントは、「大人は子どもの「安心な避難所」「安心の基地」という言葉でした。「つらかったらいつでも帰っておいで。」「元気になったね。いってらっしゃい!」といった感じでしょうか。ただ、気を付けなければいけないのは、避難所も安心基地も使う使わないは子どもの自由であるということでした。なんでも先回りをして辛い思いをさせないように、転ばぬ先の杖を常においてあげるなどおかしなことだし、「もう大丈夫でしょ? さっさと立ち立ちな」というのも乱暴なのではないかということでした。また、「ほめられ中毒」という言葉があるそうで、ほめる量の問題ではなく、他人との比較ではなく、「えらい・すごい」という抽象的な言葉ではなく、結果に着目するのでもなく…。

さあ、皆さんはどんなほめ言葉が浮かびましたか? みなさんとお話したいと思います。

夏休み明けの子どもたちは、不安を抱え込んでしまうことがあります。ご心配なことがありましたら、遠慮なく担任までご相談ください。一緒に考えてまいりましょう。